

NACOME

全国大学音楽教育学会 関西地区学会  
平成 28 年度 後期研究会

\*\*\*\*\*

平成 29 年 1 月 8 日 (日) 13:00~16:40

ヤマハミュージックリテイリング大阪なんば店 2F サロン

大阪市西区南堀江 1-2-13

主催 全国大学音楽教育学会 関西地区学会

全国大学音楽教育学会 関西地区学会  
平成 28 年度 後期研究会

プログラム

I. 開会・学会諸連絡 (13:00) 司会：山岸 徹

1. 学会諸連絡
2. 理事会報告
3. その他

II. 研究演奏発表 (13:15~14:35)

1. ピアノ独奏 小谷 朋子 (常磐会短期大学)  
ドビュッシー作曲 「コンクールのための小品」  
ドビュッシー作曲 『ベルガマスク組曲』より 「月の光」
2. ピアノ独奏 田中 慈子 (京都光華女子大学)  
プロコフィエフ作曲 『4つの小品』Op.4より 第3曲「絶望」、第4曲「悪魔的暗示」

\* \* \* \* \*

3. 二重唱 ソプラノ 伊藤 菜穂美 (武庫川女子大学)  
アルト 紀之定 淳規 (関西女子短期大学)  
ピアノ 丸井 理恵 (常磐会学園大学)

山岸 徹 作曲 歌曲集『季節の彩』(二重唱ヴァージョン)より  
「初恋」(島崎藤村作詩)、「木蓮」(三浦照子作詩)

\* \* \* \* \*

4. ピアノ連弾 フリモ 久野 以早夫 (東京福祉大学名古屋キャンパス)  
セコンド 藤本 逸子 (東海学園大学)  
シューベルト作曲 『二つの性格的行進曲』Op.121より 第2番 八長調
5. ピアノ連弾 フリモ 白倉 朋子 (大阪芸術大学短期大学部)  
セコンド 深田 直子 (大阪総合保育大学)  
ドヴォルザーク作曲 『スラブ舞曲 第2集』より 第2番 Op.72-2、第7番 Op.72-7

6. ピアノ連弾 プリモ 山本 敬子 (大阪千代田短期大学)  
セコンド 生地 加代 (武庫川女子大学)  
サン＝サーンス作曲 「死の舞踏」 Op.40
7. ピアノ連弾 プリモ 廣田 周子 (神戸女子短期大学)  
セコンド 高橋 智子 (神戸女子短期大学)  
フォーレ作曲：組曲『ドリー』より「ミ・ア・ウ」、「ドリーの庭」、「スペインの踊り」
8. ピアノ連弾 プリモ 古庵 晶子 (京都ノートルダム女子大学)  
セコンド 鷺見 美千代 (園田学園女子大学短期大学部)  
ガーシュイン作曲 『ラブソディ・イン・ブルー』
9. ピアノ連弾 プリモ 川畑 尚子 (大阪キリスト教短期大学)  
セコンド 山内 信子 (聖和短期大学)  
バーバー作曲 『思い出』より 第1曲「ワルツ」、第6曲「ギャロップ」

質疑応答 司会：永井 正幸

\* \* \* \* \*

### III. 講演 (14:50~16:30)

講師：上田 豊 先生

演題：誰にでもできる合奏編曲法 ~保育者に求められている編曲の技術~

質疑応答 司会：山岸 徹

**講師：上田 豊 先生**

**演題：誰にでもできる合奏編曲法 ～保育者に求められている編曲の技術～**

卒業生からしばしば「生活発表会で合奏をすることになりました。曲は今人気の曲です。しかし、子どもたちのレベルに合った楽譜が見つからず困っています」という趣旨の電話を受けました。また、平成 26 年度東北地区学会の研究会において、パネラーの中沢幸恵（みなみ若葉幼稚園園長）先生から、幼稚園教員アンケートの設問「音楽に関する指導で困っている事、養成校時代に習いたかった・勉強しておけばよかったと感じること」の回答のトップが「合奏指導・編曲方法（30.5%）」という報告がありました。現場では、器楽合奏編曲の技術が求められていることを改めて実感しました。

上記の卒業生の電話を契機に、授業では器楽合奏の編曲法を始めていました。初期は、ピアノ伴奏つき歌曲に打楽器を加えるものでした。次は、オスティナートによる対旋律を加えました。そして、現在は、小学校の低・中学年までの合奏が可能な、小規模ながらも合奏としての完成形に取り組んでいます。それは、「大は小を兼ねる」のとえの通りです。

1・編曲を知る：スコア → スケッチ譜 → 原曲

2・編曲の実際：原曲 → スケッチ譜 → スコア

以上について、楽譜ソフト Sibelius を活用して、実例を体感しながらお話をさせて頂きたいと考えております。

## 【上田 豊 先生 プロフィール】

山口県生まれ。1972 年、大阪芸術大学芸術学部音楽学科（作曲専攻）卒業。作曲を諸井誠、原加寿子氏に師事。

1975 年から順正短期大学奉職、順正短期大学教授（1992～2009 年まで）、吉備国際大学文化財学部教授（2009～2011 年まで）、吉備国際大学心理学部教授（2011～現在）

学会活動：日本音楽教育学会会員（1975～2016 まで）、日本音楽学会（旧音楽学会）会員（1976～2016 まで）、全国大学音楽教育学会会員（1988～現在）、中四国大学音楽学会（旧 中・四国地区大学音楽教育学会）会員（1990～現在）、岡山県音楽教育会会員（1997 年～現在）。全国大学音楽教育学会理事（1992～2014 年まで）、全国大学音楽教育学会理事長（2008～2013 年まで）、全国大学音楽教育学会名誉理事長（2013～2015 まで）、全国大学音楽教育学会顧問（2016～現在）、中四国大学音楽学会会長（1995～2003 年、2009～2013 まで）、岡山県音楽教育会会員（2006～2008、2013～2015）。

作曲作品：弦楽四重奏曲「果因」、ミュージカル「朝日長者と夕日長者」、フルートとピアノのための三つの小品、フルートとピアノのためのソナチネ、合唱組曲「吉備路と私」、吹奏楽曲「祝典行進曲」、合唱曲「なまえ」「いのち」他。

童謡「てんとうむしさん」「海の中のじゃんけん」他、園歌 高梁中央保育園、総社北幼稚他。

著 書：『楽しいオペレッタ集 1, 2, 3』（共著）音楽之友社、『楽しくなる音楽講座』（共著）エー・ティー・エヌ、『歌う、弾く、表現する保育者になろう』（共著）音楽之友社、『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌 唱歌・童謡 140 年の歩み』（共著）音楽之友社、『楽しく ア・カペラ 心にひびく思い出の歌』（共著）共同音楽出版社、『楽しく ア・カペラ ふれあいの歌』（共著）共同音楽出版社 他多数。

A series of 25 horizontal dotted lines spanning the width of the page, intended for writing or drawing.



### 3. 二重唱 山岸 徹 作曲 歌曲集『季節の彩』(二重唱ヴァージョン) より 「初恋」(島崎藤村 作詩) 「木蓮」(三浦照子 作詩)

ソプラノ：伊藤 菜穂美 (武庫川女子大学)  
アルト：紀之定 淳規 (関西女子短期大学)  
ピアノ：丸井 理恵 (常磐会学園大学)

歌曲集『季節の彩』(全5曲)は山岸徹先生が2013年～2014年にかけて“円”女声ハーモニーの委嘱作品として作曲され、初演された作品である。その第1曲「初恋」と第5曲・終曲の「木蓮」を取り上げた。「初恋」は島崎藤村の幼年時代の初恋を初々しく抒情豊かに謳いあげている。「木蓮」はその清楚な外見とは違う、内に秘めた情感が終曲らしいダイナミズムを感じさせる。「木蓮」は既に独唱で研究演奏発表をしているが今回は二重唱で演奏する。

二重唱ではメロディとハーモニーのバランスを考えて歌うことはもちろん、音量だけではなく、それぞれのパートの役割を考え、より豊かな音楽的表現を今回の課題としている。詩の響きやニュアンスを大切にすることも併せて達成したいと考える。

今後も本研究の成果を学生の弾き歌いや声楽アンサンブル指導に活かしたい。(紀之定)

紀之定先生からお声かけいただき、今回初めて二重唱での研究演奏に取り組む事になり、とても新鮮な気持ちです。

「木蓮」は一昨年の後期研究会の際、ソロで取り上げさせていただきました。ソロでは、旋律と詩の組み合わせから感じる物を、自分の中で時間をかけて表出していく作業でしたが、二重唱では、どう感じるのかを言葉で表して二人の感覚を擦り合わせていかななくてはなりません。アンサンブルを作り上げていく上で、そこが楽しさであり、難しさでもあると改めて認識しました。

山岸先生の作品は、音楽の流れに添って、気持ちがとても入りやすく書かれていると感じます。二重唱で演奏させていただく事で、独りよがりにならずに、二人で感情をコントロールしながら音楽を進めていくという貴重な体験が出来ました。

二人がアンサンブルを作り上げていく過程に、一からお付き合いくださいましたピアノの丸井理恵先生と、作品を仕上げていく過程で、貴重なアドバイスをくださいました山岸徹先生に改めて感謝の気持ちを表したいと思います。(伊藤)

**4. ピアノ連弾 シューベルト作曲 『二つの性格的行進曲』 Op.121 より  
第2番**

プリモ：久野以早夫（東京福祉大学名古屋キャンパス）

セコンド：藤本 逸子（東海学園大学）

この作品は、2 曲続けて演奏されることを前提に作られたと思われる曲で、シューベルト最晩年の作品と推定されている。非常に力強い前進的なリズムを持ち、シューベルトの作品に多く感じられる抒情的な雰囲気は少ないが、美しい旋律が印象的である。同音反復の多い旋律を持ち、トリオの部分はやや柔らかい感じがある。全体的には力強く、きびきびとした曲調である。

本日演奏する第 2 曲目の曲は、1 曲目と同様に、マーチとしては珍しい 8 分の 6 拍子で作られており曲の傾向は似ているが、より旋律的で華麗な作品となっている。プリモは素早い動きが多く演奏困難な箇所が多々見られる。また、3 拍目と 6 拍目の細かい弱拍上にアクセントが置かれ、微細なリズム感が表現されている。陽気でいささかスケルツァンドな愛すべきシューベルトのピアノ連弾作品の一つである。

**5. ピアノ連弾 ドヴォルザーク作曲 『スラブ舞曲 第2集』 より  
第2番 Op.72-2  
第7番 Op.72-7**

プリモ：白倉 朋子（大阪芸術大学短期大学部）

セコンド：深田 直子（大阪総合保育大学）

ピアノ連弾は、お互いの音を聴き合っってバランスを考える等、様々なことを経験できるため、音楽教育の上で非常に大切であることは言うまでもありません。教育学や保育を学ぶ学生にとっても、ピアノ連弾によって、音楽の分野だけでなく、気持ちを合わせて協調することや相手を思いやる心情的なこと等、学ぶことは多くあると考え、授業や行事において、できるだけ取り入れるように配慮しています。そのような指導のためにも自ら経験し、楽曲研究を含めて発表したいと考えました。

今回発表させて頂くドヴォルザークのスラブ舞曲は、1878 年に作曲された第 1 集作品 46 の 8 曲と 1886 年に作曲された第 2 集作品 72 の 8 曲の 16 曲あり、ピアノ連弾のために書かれた作品ですが、後にドヴォルザーク自身によって、管弦楽編曲されました。ボヘミアやスラブ地域の舞曲が取り入れられた異国情緒漂う舞曲集です。

今回演奏させていただくのは作品 72 の 2 番と 7 番で、特に 2 番は管弦楽版でテレビ番組や CM で使われている有名な曲です。7 番は管弦楽版でドヴォルザークの指揮により、1887 年に初演されました。

リズムカルな民族舞曲を弾きこなすには、まだまだ勉強不足ですが、今後も続けて研究していきたいと思っています。

## 6. ピアノ連弾 サン＝サーンス作曲 「死の舞踏」 Op.40

プリモ：山本 敬子（大阪千代田短期大学）

セコンド：生地 加代（武庫川女子大学）

フランスの詩人アンリ・カザルスの奇怪で幻想的な詩に靈感を得て、1872年にまずは歌曲として作曲され、1874年に管弦楽曲としてまとめられた。その後作曲者自身により2台のピアノ、ピアノとヴァイオリンに編曲されたが、フランツ・リストによるピアノ独奏編曲があり、それを元にしてさらに編曲を施した、ウラジミール・ホロヴィッツ版も有名である。

午前0時の時計の音と共に骸骨があらわれて不気味に踊りはじめ、次第に激しさを増してゆくが、夜明けを告げる雄鶏の音が響き渡るや、墓に逃げ帰り、辺りが再び静寂に包まれるまでを描写的に描いている。

スコアの冒頭には、カザルスの詩から数行が引用されている。

ジグ、ジグ、ジグ、墓石の上

踵で拍子をとりながら

真夜中に死神が奏でるは 舞踏の調べ

初演は、1875年パリのコロヌ管弦楽団であったが、失敗に終わった。特にシロホンによる骨の擦れあう音などは、作曲者の悪趣味の極みだと非難を受けたが、繰り返し演奏されるうちに、現在のような好評を得ていった。

3/4 拍子、ト短調、穏やかなワルツのテンポで、死神のヴァイオリンの動機、フルートの主題、ヴァイオリンに提示される、*largamente* と指示されただけだるい旋律、この3つが変容を繰り返していく。

## 7. ピアノ連弾 フォーレ作曲 組曲『ドリー』より

「ミ・ア・ウ」

「ドリーの庭」

「スペインの踊り」

プリモ：廣田 周子（神戸女子短期大学）

セコンド：高橋 智子（神戸女子短期大学）

ガブリエル・フォーレ（1845～1924）はロマン派の音楽から印象派の音楽へと移り変わる時代を生き抜いた作曲家です。時代の変化に一定の影響を受けましたが流されることなく古典主義的な楽曲形式を貫きました。調性崩壊の引き金を引いたワーグナーの影響も受けつつ、調性においては頻繁な転調の中に無調な響きをとり入れながらも旋律や調性からかけ離れる事はありませんでした。和声の領域ではドビュッシーやラヴェルへの橋渡しと言える存在であり、19世紀と20世紀をつなぐ役割を果たしていると思われます。組曲「ドリー」はフォーレの妻を通じて親しくなったエンマ・バルダック婦人の娘（エレヌ）愛称ドリーの誕生日祝いに毎年一曲ずつ書いた6曲からなる曲集で、この曲集でもフォーレの音楽の特徴とも言える内声の緻密な変化の上に調性的で簡素でありながらメロディを歌うという叙情性溢れた世界観を認める事が出来ます。

### 8. ピアノ連弾 ガーシュイン作曲 「ラブソディ・イン・ブルー」

プ リ モ：古庵 晶子（京都ノートルダム女子大学）

セコンド：鷺見 美千代（園田学園女子大学短期大学部）

ガーシュインがラヴェルやストラヴィンスキーらに教え請うたが断られた話は有名だが、もし彼らに教わっていたら、どのような作品が生まれたかということに思いを馳せる人は多いのではないだろうか。数年前よりコンビを組んでこの会で発表させて頂いているが、4手だけに出来るだけ少ない音で効果的なサウンドを見出すことをねらいとして選曲と楽譜選びを行っている。そのため昨年引き続き、中級編曲楽譜に手を加える形で楽譜づくりや編集を行ったが、この曲は思いのほか音を削っても豊かなサウンドになることを実感した。それは、当時オーケストレーション未経験であったガーシュインの渾身の挑戦が、シンフォニックジャズの確立に繋がったことを裏付けているのかもしれない。ピアノ連弾譜にされたものに更に手を加えることは、オーケストレーションとは逆の流れを辿るものであり、ガーシュインの挑戦への冒険かもしれない。しかしそれは、彼の本質に迫ることにもなるのではと勝手な解釈をして、本日に臨むこととする。

### 9. ピアノ連弾 バーバー作曲 『思い出』より 第1曲「ワルツ」 第6曲「ギャロップ」

プ リ モ：川畑 尚子（大阪キリスト教短期大学）

セコンド：山内 信子（聖和短期大学）

サミュエル・バーバー（1910～1981）作曲、ピアノ連弾曲 Souvenirs（思い出）Op.28は、バレエ協会の依頼により、自身が作曲したオーケストラ版「バレエ組曲」をピアノ連弾用に編曲したものである。バーバーの作風はどちらかというと保守的ではあるものの、アメリカ特有の明るさや打楽器的、ジャズ的要素などが盛り込まれ、独自のスタイルを確立しているといえる。曲は全6楽章で構成されており、今回は第1曲「ワルツ」と第6曲「ギャロップ」を取り上げる。一般に、ワルツやギャロップは舞踊曲として広く親しまれているが、保育者養成課程においても、ワルツやギャロップはマーチやスキップと並び代表的なリズム活動曲と考えられている。バーバーの舞踊作品から豊かなイメージが喚起され、保育のリズム表現活動の教授における手がかりとなることを期待している。